前列右から、プリヴェ企業再生グループ社長・松村謙三、作家の辻本健輝、洋画家・山本貞、
後列右から美術評論家・南嶌宏、日動画廊副社長・長谷川智恵子の各氏

巨匠への第一歩

昭和会展・最新世代の魅力——⑤

第44回展「松村謙三賞」辻本健輝

撮影：安達康介
本文構成：丸山かおり
取材協力：すし善銀座店

平成25年の昭和会展は2月1日～15日に開催。
昭和会賞のの中原未央「包—bus stop—」と並び、
松村謙三賞の栄誉に輝いたのは辻本健輝「Proof」。
画塾のような雰囲気で知られる長崎美術学院から、
平成生まれの新星がまたひとり生まれた。
松村社長に「これこそ油絵」と言わしめる才能の開花に至る
今日までの道のりを、制作環境のエピソードを交えて。

【ホスト】

松村謙三（プリヴェ企業再生グループ代表取締役社長・大阪大学 知的財産センター招聘教授）

山本 貞（洋画家・日本芸術院会員長）

南嶌 宏（美術評論家・女子美術大学教授）

長谷川智恵子（日動画廊副社長）

《Proof》ミックストメディア　50S
第48回昭和会展松村謙三賞受賞作品
「この作品は、朝から晩まで描いている僕自身の『証明』の意味で《Proof》と付けました」

——今回の審査はいかがでしたか。

松村　図録の辻本君のページには静物画が載っていました。その作品もよかったので、気にはなっていました。会場でこの作品を見たときは、タイプが全然違うからどの作家の作品かなと思ったんだけど、誰のものかと訊いたら、これも辻本君の作品ということだった。

長谷川　今回の審査で松村さんは、会場に入るとすぐこの作品の前に向かわれて「この絵いいねぇ」と仰っていましたね。

松村　最後は3人くらいに絞られて決戦っていう感じでした。この作品《Proof》はタッチがいい、なかなかの作品だと思ったんですが、票を入れるときになって「あ、これは僕個人が買ってもいいな」とまで思いました。基本的に私は自分のコレクションに加えていいかどうかっていう基準で、コレクターとして審査していますからね。これは現在建設中の私の美術館で買い上げました。今年から、松村謙三賞の受賞作は全部この美術館の買い上げにします。内装をすごくおしゃれに造っているから、いまから展示が楽しみです。

辻本　これまでの作品は全部家にあるので、賞を頂けた上に美術館に展示されるなんて、本当に嬉しいです。

長谷川　松村さんは展示のセンスが凄くいいんですよ。会社に伺うといつも感心しちゃうんですよ。「ここにこの絵を！」っていう場所に配置するんだけど、それがあっと驚くような掛け方なの。以前から感心していて、今度うちの画廊でも展示していただこうかと思うくらい、本当に上手でらっ

「月刊美術　2013年4月号掲載　禁転載」

描いている時間が僕そのもの。この作品は僕自身の証明なんです——辻本健輝

つじもと・けんき
1989年長崎県生まれ。2007年長崎県展野口彌太郎賞。第62回二紀展入選。第31回九州青年美術公募展入選。08年第16回長崎二紀展奨励賞。09年第8回佐藤太清賞公募美術展特選。第17回長崎二紀展大久保賞。現在、長崎県美術協会会員、長崎美術学院本科在籍。

しゃる。ですから今度ご自身の感性で美術館をお作りになると聞いて、すごくいいなぁと思っています。

——受賞の電話を受けてどんなお気持ちに？

辻本　ビックリしました。柏本龍太さんや立石真希子さんといった昭和会展で受賞した長崎美術学院の先輩たちの姿を見ているので、すごい賞を獲っちゃった、これから大変だなぁと思いました。「ダメモトで出してみたら」という柏本先生の勧めで出品したんですけど……。

山本　ダメモトどころか、大当たりだね。長崎美術学院は何度か訪ねたことがありますよ。こじんまりとしていて、油絵具の匂いがする混沌とした場所で、皆がイーゼルを並べてせっせと描いているんですよ。「そっちがそれをやるなら、こっちはこれを」という感じで互いに刺激しあう様子が、エコール・ド・パリならぬ「エコール・ド・ナガサキ」と呼びたくなる雰囲気でね、我々の時代にあった画塾みたいな和気藹々とした雰囲気が非常に懐かしかった。

——何人くらいが学ばれているんですか？

辻本　本格的にプロを目指しているのは5人くらい、一般の生徒も合わせると50人くらいです。卒業の制度はないので、僕も高校を卒業後に弟子入りという形でそのままずっといます。創立から30年くらい経っており、様々な分野で活躍する作家達を輩出しています。

山本　学院を立ち上げた小川巧君が、金を儲ける気が一切ないわけですね。本当に自分の私財にすら影響が及ぶような状態で、一所懸命にやってるんですよ。そういう指導者の熱意が塾生たちにも伝わっていますよね。小川君が愛知県芸時代に空手をやっていたせいか、「ウッス」「オッス」なんていう体育会系の雰囲気もあって、集団をまとめていくパワーがあるのね。昼時には、隅っこにいた子が「僕が当番です」ってニンジンをとんとん刻みはじめて、手馴れた感じでいつものカレーライスを作っちゃう。立石君は先輩だから「ちゃんと作ったの!?」なんて声をかけていて、すっかり姐さん格です。立石真希子が昭和会賞を獲った絵は、まさにそのカレーを作ったりするような教室の隅っこのキッチンを描いた絵だったね。そのあと長崎大学をポンとやめちゃった。あそこに漂う絵具の匂いには、魔力があるんですよ。

《proof》ミクストメディア　10F
昭和会展のパンフレットに掲載された同名の別作品。作家の意向で審査前に急きょ、人物画に差し替えられた

長谷川　私も柏本先生が10年前に日動美術財団賞を受賞なさったのをきっかけに、何度か伺いましたけど、ある時なんか立石さんがお茶汲みをしてらした（笑）。面白いのは、皆さんで空間を共用していても、それぞれが全部違っていて個性的なこと。同じ場所で描くと互いに影響を受けて、似たような方向にいきがちなものでしょうけど、そうじゃなかった。

［右］《律動》油彩・キャンバス　80F
長崎県展・野口彌太郎賞　2007年
［左］《a closed room》油彩・キャンバス　100S　二紀展初出品　2007年

辻本　小川先生の指導のおかげです。先生は技術よりも「絵描きとはどういうものであるべきか、それを徹底的に考えなさい」とずっと仰っていました。「他者とは違う、いいものを作るということをずっと意識しなさい」と。僕がすべて理解できているのかどうかはわかりませんが、少しでも理解していきたいという気持ちはあります。

長谷川　小川先生に聞いたところ、辻本さんが美大受験をやめたとき、石膏デッサンはやめさせて生の人間をデッサンするように仰ったそうです。それが今、こういう絵に生きているんじゃないかと思います。

松村　どうして受験生には石膏デッサンをやらせるんですか。

南嶌　フランスの美術学校の伝統をそのまま入試に移入してしまった、その状況が続いているんです。このシステムはやはり時差を置きながらフランスの影響を受けた韓国、そして中国にも採用されてしまいました。しかし、現在では欧米の優れた美術大学ではポートフォリオを提出させた上で、長いところでは1週間くらいかけて受験生と面談する。言葉によるプレゼンテーションを通して、その受験生が何を考えているか、どんな感性を持っているかを見るんです。日本の美大でも入試スタイルを変えようという動きが出てきましたが、石膏デッサンに帰結する美の基準に、いまだに日本の美術界は囚われているといえるかもしれませんね。勇気を持って意識変革をしていかなければ、将来性のある才能を見落とし続けてしまうかもしれません。

山本　美大以外でも基礎を学ぶという変な精神主義がありますね。私は中高年の方から、絵を描くにあたっては「まず石膏デッサンですよね」と聞かれることが多いですね。そんなものやらないで、いきなりお子さんなりご主人なりの顔を描くことから始めてはと言うんですけどね。本当に描きたいなぁと思っていることでも、石膏デッサンに閉じこめられて数年も経てば、いつのまにか気持ちが萎えちゃうという可能性もありますから。

直感で認めさせる作品のオーラ

——平成生まれの受賞者は、2人目です。

長谷川　昭和から平成に変わったときに「昭和会賞」を改称する案が持ち上がったんですが、先生方が「この名前で定着しているんだから変えなくていいでしょう」と仰ってくださりその話はなくなったんです。その頃は「平成生まれが賞を獲るのはまだまだ先だから」と思っていました。

辻本さんは23歳という若さではありますが、高校卒業の翌年には県展の野口彌太郎賞を獲っていらっしゃる。画家としてのスタートはわりに早かったけれど、今回の受賞はたまたまではなくて、ちゃんとステップを踏んでこられたんですね。

山本　二紀展の初入選は何歳のとき？

辻本　18歳のときです。まだ今のようにプロの絵描きになりたいという意識は強くなかったので、受賞できたのは運が良かったんです。それにやっぱり小川先生の的確なご指導やいろんな方のサ

ポートがあったからです。二紀会の先生方の「作家は50歳からだからね、コツコツ頑張りなさい」「結果が出なくても続けなさい」という温かい言葉を励みにしながらやってきました。親も、節目節目で受賞という結果が出たので、自然と応援してくれるようになってきました。特に今回、松村謙三賞を頂いたことで、はっきりと「好きなようにやっていいよ」と言ってくれました。

松村　僕はこの絵を見たときに、まさか20代の子が描いた絵だとは思わなかったですよ。年齢の話をされますけど、それは関係ないですね。結局、天賦の才があってこその栄冠ですよ。芸術院会員の先生を含んだ錚々たる画家が票を入れたし、賞金を出してリスクをとる私みたいなコレクターも、それに番号見てたから知ってるんだけど、ここにいる日本有数の美術評論家の先生もあなたに票を入れたんだから。

南嶌　松村謙三賞を受賞できたわけだから、松村謙三という人が人生に何を求めて生きている人であるかを、あなたなりにしっかりと受け止めなければ、今回の受賞の本質を見誤ってしまう。松村さんは優しそうな目をしているけど、実に厳しい人ですよ（笑）。だからこそ、そんな松村さんがその名の付いた賞をあなたに捧げたという想いを、大切にしてほしいですね。

山本　事業家というのは、毎日が判断の連続でしょう。どんなにデータがあったとしても、最終的に進むべき方向を選択するのは、「こっちだ！」っていう直感が決め手なんだと思う。だから優れた事業家である松村さんは、いろんな面での直感力の機能が普通の人よりも鍛えぬかれて冴えてると思うわけです。

長谷川　その直感というのも、たくさんの絵を見ていらっしゃるからこそ磨かれるんじゃないかしら。直感で見るというのは、絵画の正しい見方だと思います。実は、作品の真贋鑑定も直感が決め手なんです。パッと見たときに「これはおかしい」っていうのが贋作。長く見ていると、いいかなと迷いが出てくる場合があるそうです。直感が正しいといわれます。

松村　私の場合、絵を買うかどうかのジャッジにかかる時間は10秒。たとえそれが億の作品であっても、たったの10秒ですよ。

南嶌　かかりすぎです（笑）。

松村　僕もいま3秒って言おうかな、と思ったの。でもあんまり短く言うと何も考えてないみたいだから10秒って言ってみたんです（笑）！　厳密に言うと、作品を見て、1、2、3……。いや、……1秒のときもある。要するに見た瞬間決めてるって感じですね。基本、買うときは迷わない。一晩考えてから買うなんてことは絶対にない。

山本　僕は、松村社長が受賞作のどのへんを面白いと思ったのかに興味があります。評論家は言葉の世界というかロゴスを通したアプローチだから違うかもしれないけど、私たち画家が見る目も直感なんです。よく展覧会の審査にはどれくらいの時間をかけるのかとよく尋ねられますが、皆さんご存知のとおり、運んで来て、眼の前に置かれた作品に対して、審査員が挙手してすぐに決まっちゃうことが普通です。安直に見えるという人がいるけど、じっくり見ると逆に良し悪しが見えなくなってくる。直感で一目惚れみたいなものがあるんですよ。それを理屈で言えといわれるとなかなか難しい。そこで、人の直感に訴えるっていうのは、頭の中の機能が総合的に瞬時に動いて判断するのだと思います。事業をやっておられる松村さんに、その直感について聞いてみたいな。

南嶌　頭だって使ってますよね。（一同爆笑）

松村　もうちょっといい言い方をお願いしますよ（笑）。月刊美術が、面白いと思って記事にしちゃうじゃないですか……（笑）。

　この受賞作はもう、見た瞬間に構図も面白いし、こう、なんていうかなぁ……白い壁画調の背景に、この男がいて、こっちはおばさんなのかな？　とにかく部分的なところはあんまり目に入らなかったね、まずこれを見て「アッ」と思った。

山本　全体の空気みたいなものですか？

松村　そうですねぇ！　オーラみたいなものが、いい絵には必ずあると思うんですよね。「よく描き込まれているからいい絵だ」なんて言われるけど、僕はそんなこと全然関係ないと思っているんですよ。日本画みたいな精密な感じじゃなくて、油絵だからこそ描けるオーラがある。マティスなんて、デッサン画で1億5000万とかするでしょ。僕は、藤田嗣治の線描で、ぴゅっと描いた裸婦を日動画廊さんを通じて手に入れたことがあるけども、要するに、描きこもうと思ったら、なんぼでも描きこめる絵なんですよ。でも、それはそのままで価値があるんですよ。どんな画家も、完成なんか常にないじゃないですか。ピカソだってどんどん変遷していった。だから、完成された絵っていうのは、僕にとってはよくわからないもの。

《Bloomy girl》油彩・キャンバス　100S　2011年

この《Proof》も「あ、いい絵！」って思ったんですよね。それで手元の昭和会の図録を開いて探したのよ。ところが、ないのよ！「あれ、ないじゃん！　誰が描いたのかな」って訊いたら「これも辻本君の作品だ」っていうじゃない。あぁ、これは番号を控えとかなきゃな、と思ってね。

僕が欲しいのは、画家が命を描けた絵。この作品こそ絵画、これこそ油絵だよ。——松村謙三

まつむら・けんぞう
プリヴェ企業再生グループ株式会社代表取締役社長。他に大阪大学法科大学院招聘教授。大阪大学知的財産センター招聘教授、経済同友会金融市場委員会委員も。今秋、「松村謙三美術館」を清里にオープン予定。

エコール・ド・パリならぬ「エコール・ド・ナガサキ」から現れた才能だね——山本 貞

やまもと・てい
洋画家・日本芸術院会員、二紀会理事長、日本美術家連盟理事長。1958年武蔵野美術学校（現武蔵野美術大学）卒業。62年早大文学部中退。64年ニューヨークに留学。72年第8回昭和会展での優秀賞作家でもある。

鴨居玲を髣髴させる人間への深い眼差し

長谷川　松村社長が仰ったように画面にインパクトがあるし、デッサン力もある。色とモノの両方を見せられるというのは強みだと思います。テクニックだけじゃないオーラのある作家といえば、作風は全然違いますけれども、鴨居玲を思い出させます。これからを楽しめる作家ですね。

南嶌　その直感は当たっている気がしますね。この受賞作は一見淡泊に人間存在を描きながら、サビエやベーコンに通じるある種の比重を持った作品に見える。そしてそれは、さきほどポートフォリオを見せていただいたんですが、長年描いていた金魚のグロテスクさを継いでいるような気がします。存在の比重と形容したいような、なんともいえないニュアンスが潜んでいる。

辻本　ルシアン・フロイドみたいに、体質が出る作品をすごくいいなぁと思いますね。日本人作家にはできないような気持ち悪さを凄いと思います。フランシス・ベーコンみたいな泥臭い絵も好きです。

南嶌　辻本さんの中心的な関心に、人間存在の不思議とか、モノが存在するということのグロテスクなまでの美しさ、そういうイメージが深いところにあって、現在の絵画が生み出されてきたんじゃないかな。いつか崇高なグロテスクさをあなたらしい表現で結晶化してほしいと思います。

松村　金魚のシリーズより断然こっちのほうがいいよ。金魚の作品は、悪いけど、あれは普通。受賞作のほうにあなたの個性が出てるし、あなた自

人間存在の不思議や、モノがここにあることの美しさをいつか結晶化して欲しい。

――南嶌 宏

みなみしま・ひろし
美術評論家。第53回ベネチア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、国際美術評論家連盟理事、全国美術館会議理事等を歴任。現在、女子美術大学教授。1957年長野県生まれ

身がよく出てる。インパクトは金魚のほうがあるかもしれないけど、それは外面的だよね。この受賞作こそ絵画、これこそ油絵だよね。僕はそう思う。

山本　静的に仕上がっている部分は、言ってみれば素描風な追究中のもので、人体というモチーフで何かを追究模索している状態なんですね。鴨居さんも、追究型の人物画ですね。計画をもとに完成に向けて進めるのではなくて、追究しているうちに本質の実体に迫っていく、という感じ。最近は細密描写の流行で、若い世代の画家はカチーッと作品を仕上げちゃうから、こういう辻本君のような新鮮さというのは、なかなかない。それもあってか二紀会では、金魚シリーズは、ある程度の評価がありました。展示された時の効果も計算してたかもしれない。

辻本　そうですね。当時は「展覧会用の作品」みたいになっていたかもしれません。

山本　そんなふうにそこそこの評判があったにもかかわらず、彼は新しく人物を発表し始めた。金魚はやっぱり色が魅力だけど、人物を描いた作品はひょっとして、消した形を追っていくというか、「色をぬいた存在感」を意識し始めたんじゃないでしょうかね。

辻本　金魚シリーズのように色に頼らないようにと考えて、今のようなグレーの調子に移行してみました。すると自分の体質に合っているなぁと感じました。二紀展で賞を頂いたのも、この方向性でやっていこうという励みになりましたね。

――作品タイトルの《Proof》とは証明や証拠という意味ですね。

辻本　描いている時間が僕自身そのものなので、本当は無題で出品したかったんですが、それは失礼かな、と。それで、朝から晩まで描いている僕自身の証明、という意味で《Proof》とつけました。いろんなところで賞を獲った頃は、金魚を描き続けなきゃいけないと少し思っていたんですが、あるとき、金魚である必要はないんだと気づいて。それを境に、賞を獲ったことも、昔の自分も忘れて一からスタートしようと思って、20歳のときに人物デッサンを始めて本格的に描き始めました。

長谷川　金魚から人物に移る、ちょうど脱皮していく過程をポートフォリオで見せていただいて、私が嬉しいなと思ったのは、辻本さんが自分を真似るのではなくて「自分をまた違う自分にしていく努力ができる」という資質をこの年齢で持っていることですね。これからも変わっていくかもしれないけれど、いつまでも自分を忘れないで、流されないでいてほしいな。彼はすごく優しい性格だと思うの。双子の弟さん（日本画家の辻本康輝氏）が多摩美大に進学が決まったから、美大受験をやめて地元に残ることを決めたっていうし。

《form》ミクストメディア・キャンバス　100S　2012年　第66回二紀展奨励賞

南嶌　双子？僕と一緒だ。

松村　初めて聞いたなぁ。そうですか！

南嶌　兄は彫刻家。僕は見るだけだけど、兄がいなかったら、今の自分は絶対にあり得なかったくらい彼には感謝してるんです。弟さんに東京の美大に進むことを譲り、自分は長崎で頑張る。その双子愛、ものすごくわかりますよ。これからの美術界は双子の時代ですよ（笑）。

山本　長崎の学院の人たちは絵の上でちょっとませているかな。小川巧君のユニークな指導もあって辻本君も柏本も立石も、普通だと10年くらいかけてぼんやりとたどり着く地点を、わりあい早くピッと感じとった。

南嶌　辻本さんはただ売れればいいというなタイプの人ではないですね。自分の絵を純粋に追求したい。それでいいんです。コレクターはその芸術家の覚悟を所有したいんですから。

辻本　絵を描ければ、絵を続けていけさえすれば場所はどこでもいいです。ただ、描いた作品が海外で通用するようになりたい、という気持ちはすごくあります。そのために朝から晩まで描いて、夜中は居酒屋でバイトしてきました。今回賞金を頂いたおかげで、当分はバイトをしなくて済むから夜中も絵を描けるなぁと思って。それが一番よかったです。

山本　よかったね。君の幸せは、いつも絵を描いているっていうことだから、それを継続できればってことなのね。

松村　世界にアプローチするにはどういう方法があるんですか？

南嶌　平常心で描ける類のものではないでしょうが、ベーコンに代表されるような過去の系譜を超えていく気概を持つことですね。そして人生経験をどれだけ蓄えられるかが大切です。この絵を描いたから。これで思い残すことはないと思える作品には揺るぎない評価がきちんとついてきます。

松村　僕は絵を買うときはね、画家が命をかけて描いた作品を買う。だから大きいのしか買わない。買うのは１００号以上。命をかけた絵を買いたいと本気で思うよ。「売り絵」なんかに興味ない。

辻本　ありがとうございます。賞に恥じないようにがんばっていきたい、ただそれだけです。そしてこれからも納得できる絵が描ければ最高です。

色とモノの両方を見せられるというのは強み。鴨居玲に通じるものがあります

――長谷川智恵子

はせがわ・ちえこ
日動画廊取締役副社長。日本洋画商協同組合理事長をつとめたほか、95年多年の日仏交流が評価され、フランス政府よりレジオン・ドヌール・シュヴァリエ勲章を受章。「気品磨き」などの著書多数

［右］《Unititled》紙・ミクストメディア　2012年
［左］《Unititled》油彩・キャンバス　10F　2011年